

京極読書新聞 <第35号>

発行日 平成24年 7月 1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2012

第2回

空には初夏の青空が。北海道のいちばん爽やかな季節の中で、「京中生にインタビュー2012」第二弾。<編集部>

村田翔希くん(1年生)「植物図鑑」 柴山あかりさん(3年生)「ゴールデンスランバー」

—— 有川浩の「図書館戦争」シリーズは読んでいたんだけど、「植物図鑑」はまだでした。村田くんの読書感想文のおかげですね。とても面白かったです。

村田 最初のページの「雑草という名の草はない。すべての草には名前がある。」という言葉にひかれて読み始めました。

—— けっこう緻密に計算されたお話だと思いましたね。「ヘクソカズラ」で始まり、最後、イツキがさやかのもとに戻ることを決心させる花が「ヘクソカズラ」だったとか。なんとも、芸が細かい。

村田 僕は「ノビル」の話が大好きです。美味しそう…って思った(笑)

—— 私も、イツキがいつも使うボン酢、実際に売られているものなのかなあ…って、インターネットで調べたりしました。

村田 植物の知識がぐーんと広がったのもこの本の収穫なのですが、なにか、それだけでは終わらない。「信じていれば叶う」みたいなことを自然におしえてくれるのがこの小説のいいところだと思います。

—— 同感です。これを「夢物語」と切って捨てるような大人にはなりたくないなあ。さて、「ゴールデンスランバー」。私は、若い頃二ヶ月くらい仙台で過ごしていたことがあって、この主人公・青柳雅春が逃げる仙台市内の風景がすごく懐かし

い。

柴山 私は映画の方を先に見て、とても面白かったので本を読みました。本の方は、ちょっと難しいところもありましたけど。

—— そうですか。私は丁寧に書かれた読書感想文だと思いましたよ。読み間違いもないし、登場人物に対する目配せもセンスがいい。特に、青柳雅春のお父さんのことを落とさず書いたところはフィインプレーだと思います。

柴山 印象的なお父さんですよ。テレビのリポーターたちに向かって「本当に雅春が犯人だと信じているのなら、賭けてみる。金じゃねえぞ、何か自分の人生にとって大事なものを賭ける。おまえたちは今、それだけのことをやっているんだ。」という言葉に、親子というものを感じました。

—— テレビカメラに向かって「雅春、ちゃっちゃと逃げろ」ですからね。すごいです。

柴山 この本を読むと、なにか、温かい気持ちとすがすがしい気持ちの両方が湧きあがってきます。

—— ふたりとも、選ぶ本がカッコいいね。「ゴールデンスランバー」式に言うと「ロック」しているみたいな感じか。

村田 いつも、なるべく本を読むようにしています。

柴山 特に「本を読まなければならない」とは意識していないのですが、興味を持ったことについては、本を読むように心がけています。

—— 今はちょっと背伸びでも、大きくなったら「もう一度読み返す」という技が使えますからね。若い人がうらやましい。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2, 3ページ目に続きます



左: 村田翔希くん(1年生)
「植物図鑑」 有川浩著／角川書店
右: 柴山あかりさん(3年生)
「ゴールデンランバー」 伊坂幸太郎著／新潮社



左: 佐藤瑛二くん(2年生)
「心で勝つ技で勝つ」 小谷野栄一著／潮出版社
右: 片桐一稀くん(2年生)
「グラウンドの空」 あさのあつこ著／角川書店

片桐一稀くん(2年生)「グラウンドの空」 佐藤瑛二くん(2年生)「心で勝つ技で勝つ」

——「グラウンドの空」、おもしろかった。「バッテリー」よりも物語のつくりが単純でわかりやすかった。単純なんだけど、その分、力強いというか。

片桐 山城瑞希(キャッチャー)の、本物のピッチャー(作楽透哉)に出会えた喜びにあふれています。

——そう、「本物」。小説の中で、瑞希が「一流だ二流だという前に、(透哉は)本物じゃなかったのか」と気づく場面がありますけれど、あそこなんか最高ですね。

片桐 瑞希と透哉の出会いもいいのですが、それに加えて、瑞希の幼なじみ・田上良治の、瑞希に対する、ちょっとひねくれた友情もよかったです。この三人の、チームにかける思いや、友達というものにかける思いが、地区大会の開始に向かってまとまって行く展開がよかったです。

——そういえば、二人とも野球部？

佐藤 そうです。

——どこ、守ってるんですか？

片桐 ぼくは、ファースト、ピッチャー、センターです。

佐藤 ぼくは、ファースト以外の内外野全般です。

——へえ、微妙に物語の主人公たちのポジションと重なっているのが面白いね。じゃ、佐藤くんは、サードの小谷野選手から学ぶことが多かったでしょう。

佐藤 はい。この本を読んで、とても考え方が変わりました。

たとえば、ランナー二、三塁の時、今までだったら長打を狙うことしか考えないのですが、リーグトップの打点王・小谷野選手の「僕はいつも、次の打者につなげて、チームに貢献することだけ考えています」という言葉を聞いてからは、自分が今バッターボックスに入っている意味を考えるようになりました。

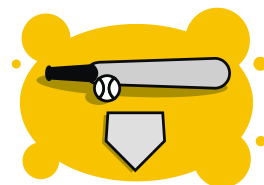
——自分が、今、野球をやっている意味ですね。

佐藤 そうです。それと、小谷野選手は、逆境の乗り越え方がとても巧いと思います。

——それは私も感じますね。この本は、毎年誰かが読書感想文コンクールでとりあげる、京極町独特のベストセラーみたいな本なんですけど、なにか、人に勇気を与える力があるみたい。

佐藤 ヒルマン前監督の野球を「楽しめ」という言葉とか、小谷野選手の「(右ひじ手術で)野球ができなかった時のつらさに比べたら、(ワンバウンド送球しかできない)そんな小さな恥ずかしさなんて屁でもない」という言葉とか、心に響く言葉がいっぱいあっていま

片桐 だから、友達や後輩に読み継がれて行くんですね。



余談「平清盛」(6)

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一(むらやま・こういち)

「ドラマ・清盛」が大ピンチのようです。5月27日放映第21回の視聴率が、10.2%と開始以来最低を記録したということです。まあ、NHKは鷹揚ですから視聴率などに一喜一憂することもないかも知れませんが、民放だと制作スタッフは真っ青でしょう。

歴史好きの人、あるいはこの時代の歴史に詳しい人は、前半の清盛幼少時の物語があまりにもフィクション臭が強く、“劇画”的であったことに興ざめし、白けてしまったのではないかな。一方、この時代の歴史にあまり詳しくない人々は、ほとんど説明のないままに次々と登場する人物と、その錯綜する人物関係の多様さが整理できず、見つけたい意欲を失ってしまったのではないかと……と、この現象(低視聴率)を分析(と言うほどのものではありません)してみました。ただし、あくまでも私の“思いつき”ですので、深く考えないでください。

さて、最低視聴率を記録した第21回以降第23回(6/10)までは、保元の乱の勃発から、戦後処理に至る物語です。さすがにこの頃の史料は豊富なので、ほぼ史実に沿った展開になっています。しかし、もちろん気になる点もないわけではありません。

保元の乱においては崇徳上皇には源為義と子息たち(義朝を除く)、平忠正と子息たちが味方し、後白河天皇(当時

には平清盛とその一族、そして義朝が味方します。つまり、父と子、叔父と甥が戦うことになりました。そして、勝者となった後白河天皇側の清盛は叔父を、義朝は父を処刑するという悲惨な結末を迎えます。親兄弟、親族が敵味方に分かれた原因を、ドラマでは父為義と烈しく対立する義朝の姿、徹底して清盛を嫌う叔父忠正の姿を描いて、この両者がいずれ対決することが必然であることを示唆します。たしかに、こういう経緯もあったかも知れませんが、もちろんドラマとしてはこうした経緯を強調するほど、面白いシーンを描くことができるでしょう。しかし、父子、叔父甥の確執不仲という、いわば個人的な問題だけが、敵味方を分ける決定的な要因ではないはず

源為義は長く藤原頼長に仕えていたので、崇徳上皇を支持する頼長陣営の総大将を命じられます。高齢を理由に辞退しますが許されません。そこでこれを最後の戦と覚悟した為義は、敵方となった義朝に源氏嫡流にだけ代々伝えられている「源太産衣(げんだうぶぎぬ)」「膝丸」という二領の鎧を届けました。これで義朝は正式に源氏の棟梁として認められたこととなります。

余談「平清盛」(6) 3ページ目からの続きです

ちなみにこの「源太産衣」は、平治の乱の際に義朝から頼朝へと伝えられます。一方の清盛はもともと上皇方(つまり忠正と同じ)でしたが、美福門院得子の強い要請により、騒乱勃発の直前に天皇方に付きます。ここには、叔父甥の対立というよりも、清盛の鋭い情勢把握と明晰な政治的判断が働いていたように思われます。

『保元物語』に興味深い一節があります。剛弓で知られる鎮西八郎為朝が、兄義朝を射落とそうと狙い定めた瞬間、親子兄弟が敵味方となったこの状況を《弓矢取りの謀(はかりごと)》「汝は内(天皇)の御方(みかた)へ参れ。我は院方へ参らん。汝敗けば頼め。助けん。我負けなば、汝を頼まん」など約束して、父子立ち別れてかおはすらむ* と考えて義朝を射ることを止めたというのです。つまり、親子は約束の上で敵味方として戦ったという解釈です。これこそ、抬頭期の武士の不安定な立場をよく表していると思われる。一見卑怯な態度に見えますが、合戦に際して一族が全て亡びてしまわないようする当時の武士の精一杯の配慮なのです。しかし、この約束は後白河天皇の側近、信西入道の下した非情な命令によって果たされることはありませんでした。後年、壇の浦において一族一門ごとく滅亡する平家は、こうした武士が生き残るための配慮が、もはや通用しないことを悟ったからなのかも知れません。

親子、親族の確執という個人的問題を軸に、最後には理解し合い許し合う……と描く「ドラマ・清盛」は、いかにもNHK好みの“ホームドラマ仕立て”のように感じました。

〔以下次号〕

【注】* 『保元一平治物語の世界』(前出)

[参考図書] *印は湧学館所蔵
今まで掲げた参考図書と重複するものは除く

- ・『愚管抄・全現代語訳』
(慈円/著・大隅和雄/訳・講談社学術文庫)



▲保元・平治合戦図屏風より(部分)
屋形から出る黒い鎧の武者が平清盛

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

